

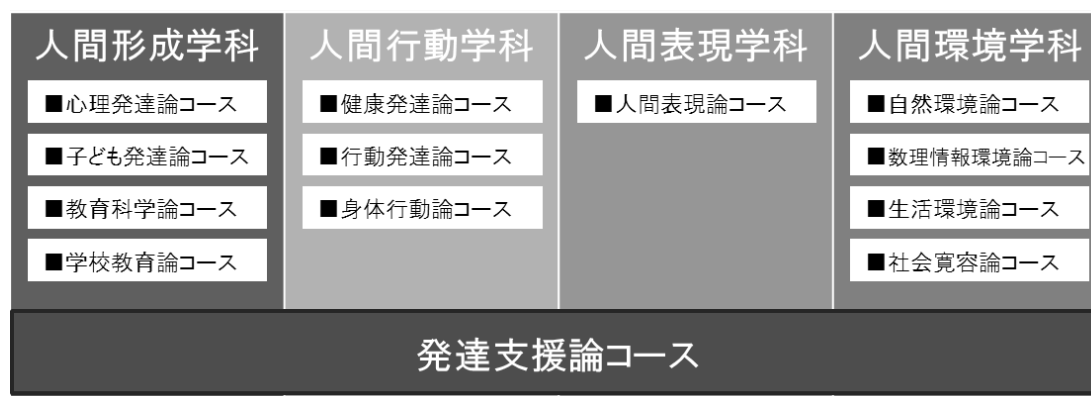
## 5. 発達科学部

I	発達科学部の教育目的と特徴	5 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	5 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	5 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	5 - 17
III	「質の向上度」の分析	5 - 24

## I 発達科学部の教育目的と特徴

本学部では、教員養成を主たる目的とする旧教育学部を母体に、平成4年10月に、人間発達科学科、人間環境科学科、人間行動・表現学科の3学科体制で発足した。その理念は、「乳幼児期から高齢者に至るまでの人間の発達のあらゆる側面を総合的に教育・研究するとともに、人間発達を支える環境を様々な側面から教育・研究する」ことである。この10年を超える歩みは、履修コースを単位とした創造的な取り組みの中で、新たな教育研究領域を着実に構築してきている。しかし他方では、教育学部時代の各教科を基に講座・学科が編成されていた側面もあったために、外部評価で「学部理念の明確化」、「それに見合った学科の再編」、「外から見える発達科学部の姿」などが課題として指摘されていた。法人化に伴い、「幅広く深い教養、専門的・国際的素養と豊かな人間性を兼ね備えた人材を育成する」ために、「学部においては、専門教育の内容とその実施体制の再編と充実を図る」という神戸大学の第1期中期目標にしたがって、発達科学部の一層の理念の明確化、個性化を図ることを目指した再編に取り組み、平成17年度に、人間形成学科、人間行動学科、人間表現学科、人間環境学科の4学科体制に、また学部附属施設であった人間科学研究センターを改組し、新たに大学院総合人間科学研究科（平成19年度からは人間発達環境学研究科）の附属施設として発達支援インスティテュート《資料1参照》を設立し、教育研究に取り組んでいる。

《資料1：発達支援インスティテュート組織図》



### （教育目的）

本学部及び各学科の教育目的は《資料2》のとおりである。この教育目的を達成するため、現行第2期中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」と定めている。

《資料2：学部及び各学科の教育目的（学部規則から抜粋）》

発達科学部の教育目的
広い知識を授けるとともに、乳幼児期から高齢者に至るまでの人間の発達及びそれを支える環境について様々な側面から教育研究し、教養、人間の発達及びそれを支える環境に関する専門的な知識並びに問題解決能力を有する人材を養成する。

学科	教育目的
人間形成学科	広い知識を授けるとともに、人間の誕生から高齢期に至るころ及び諸能力の発達並びに人間形成にかかわる諸要因について、社会的及び文化的な観点から教育研究を行い、教養並びに心理、発達、教育及び学習に係る専門的な知識を身に付けた人材を養成することを目的とする。

人間行動学科	広い知識を授けるとともに、人間の行動について、健康発達、行動発達及び身体行動の解析及び応用の視点により、自然科学及び人文・社会科学の面から総合的に教育研究を行い、教養及び各年代における健康課題の解決策、子どもから高齢者に至る人間の行動の発達及び適応を多面的に解明する能力並びに運動・スポーツ等身体活動にかかわる高度な知識及び活動的な生活の実践力を有する人材を養成することを目的とする。
人間表現学科	広い知識を授けるとともに、音楽、造形、パフォーマンスアート等の人間の様々な表現や創造活動について教育研究を行い、教養、表現領域についての幅広い知識並びに個々の領域における専門的な知識及び技術を身に付け、研究、創造及び社会的実践に関する能力を有する人材を養成することを目的とする。
人間環境学科	広い知識を授けるとともに、人間の発達の在り方に深くかかわる環境の諸問題を総合的・学際的に探究し、自然環境、数理情報環境、生活環境及び社会環境の視点から教育研究を行い、理系・文系の枠を超え、教養及び多様な専門的知識を身に付け、それらの統合・融合を積極的に図り、新たな人間環境の創造に向け、理論的・実践的な問題解決の能力を有する人材を養成することを目的とする。

### （組織構成及び教育上の特徴）

これらの目的を実現するため、本学部では《資料3》のような組織構成をとっており、教育上の特徴は《資料4》のとおりである。

#### 《資料3：組織構成》

学科	大学院講座	学部履修コース
人間形成学科	発達基礎論講座、 教育・学習論講座、 発達臨床論講座	心理発達論コース、子ども発達論コース、 教育科学論コース、学校教育論コース
人間行動学科	人間行動論講座	健康発達論コース、行動発達論コース、 身体行動論コース
人間表現学科	人間表現論講座	人間表現論コース
人間環境学科	環境基礎論講座、 環境形成論講座	自然環境論コース、数理情報環境論コース、 生活環境論コース、社会環境論コース
学科共通	発達支援論講座	発達支援論コース

#### 《資料4：教育上の特徴》

<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本学部が提供する授業科目は、「すべての専門分野に共通した豊かな教養と幅広い知識」「専門的知識」「問題解決能力」のいずれかの学習目標を掲げて配置されており、教育目的に示した「身につける能力」に即した体系性を明確に具備している。</li> <li>2. 主体的判断力を身に付けるため、少人数対話型教育を実施している。45%のクラスが20名以下、70%以上のクラスが40名以下の編成で多様なアクティブ・ラーニングの手法を活用（90%以上の教員が学生の主体的参加を促すためにそれぞれ独自の工夫を実行）。</li> <li>3. 学生の主体性や実践性への意識を喚起するため、学外で活躍する人を招き実践的な体験や知見・技術等を伝えるゲストスピーカー制度を積極的に活用している。</li> <li>4. 本学部の研究科附属研究施設であるヒューマン・コミュニティ創成研究センターの活動と連動しながら、アクション・リサーチの手法を基本に据えた実践的教育を様々な形で遂行することで、「既存の学問領域を超えた新しい実践知の創造を担う先導的人材」を育成する教育を行っている。</li> </ol>
--

### （想定する関係者とその期待）

本学部の教育に関する関係者としては、受験生・在学生及びその家族、卒業者及びその雇用者、ならびに本学部に進学させようとする高校等を想定している。これらの関係者からの「幅広く深い教養と、人間の発達とそれを支える環境についての専門的素養と問題解決能力」を持った人材の育成という期待に応えるべく、教育を実施している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

発達科学部は前述の教育目的を達成するため、人間形成学科、人間行動学科、人間表現学科、人間環境学科の4学科を設置し、各学科には、養成する人材の具体像を反映した履修コースを設定している《資料3(5-3頁)》。また、特徴ある取組として、一定の専門的知見を修得した3年次の学生を対象に、いずれの学科からも進むことができる学科横断コースとして発達支援論コースを設置している《資料18参照》。なお、平成26年度には、人間表現学科における教育研究を高度化・総合化するため、3コース(表現文化論コース、表現創造論コース、臨床・感性表現論コース)を1コース(人間表現論コース)に再編した。また、発達支援インスティテュートのヒューマン・コミュニティ創成研究センター(以下、HCセンターと略記)及びサイエンスショップは、正課外を含めて、学生が社会と関わる取組の中で主体的に学び成長するフィールドを提供し、学習を支援している(「III「質の向上度」の分析」5-23頁、(1)事例②参照)。

教員の配置状況については、《資料5》のとおりである。必修科目及び殆どの選択科目は原則として専任の教員が担当している。また、学生の収容定員と現員の状況は、《資料6》のとおりであり、専任教員一人あたりの学生収容定員は11.5名と、適切な規模となっている。全教員に占める女性教員の割合は22%で、学内部局間では高い値となっている。

《資料5：教員の配置状況(平成27年5月1日現在)》

学 科	収容定員	専任教員数(現員)											助手		非常勤教員数		
		教授		准教授		講師		助教		計							専任一人当たりの学生数
		男	女	男	女	男	女	男	女	計:男	計:女	総計					
人間形成学科	360	10	2	11	3	0	2	0	0	21	7	28	12.9	0	0	2	0
人間行動学科	200	7	2	5	1	0	2	0	0	12	5	17	11.8	0	0	1	1
人間表現学科	160	4	1	5	4	0	0	0	0	9	5	14	11.4	0	0	4	1
人間環境学科	400	18	3	13	2	1	0	0	0	32	5	37	10.8	0	0	5	1
発達支援論コース	(36)	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	12	0	0	1	1

\*1 収容定員の20は、学科共通で外数である。

\*2 発達支援論コースの収容定員(36)は、学科の収容定員に含まれる。3年次で所属する。

\*3 専任一人当たりの学生数は、学科共通を除いての人数である。

《資料6：学生定員(収容定員)と現員の状況》

学 科	年 度	収容定員	現 員	定員充足率(年)	定員充足率(中期)
人間形成学科	平成22年度	90	94	1.04	1.05
	平成23年度	90	95	1.06	
	平成24年度	90	95	1.06	
	平成25年度	90	93	1.03	
	平成26年度	90	92	1.02	
	平成27年度	90	95	1.06	
人間行動学科	平成22年度	50	50	1.00	1.03
	平成23年度	50	52	1.04	
	平成24年度	50	52	1.04	
	平成25年度	50	51	1.02	
	平成26年度	50	52	1.04	
	平成27年度	50	51	1.02	
人間表現学科	平成22年度	40	42	1.05	1.04
	平成23年度	40	42	1.05	

	平成 24 年度	40	40	1.00	
	平成 25 年度	40	42	1.05	
	平成 26 年度	40	41	1.03	
	平成 27 年度	40	43	1.08	
人間環境学科	平成 22 年度	100	104	1.04	1.03
	平成 23 年度	100	101	1.01	
	平成 24 年度	100	104	1.04	
	平成 25 年度	100	103	1.03	
	平成 26 年度	100	101	1.01	
	平成 27 年度	100	105	1.05	

(註) 学部全体の収容定員は、1140 名（一般入試（280）×4 + 編入学（10）×2）で、現員は 1241 名（平成 27 年 5 月 1 日現在）、定員の約 9 % の増となっている。

入学者の選抜については、全学及び発達科学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料 7：神戸大学及び発達科学部アドミッション・ポリシー》、これに基づき一般入試の他、アドミッション・オフィス入試、社会人特別入試、3 年次編入学試験など多様な選抜を実施している《資料 8》。この結果、例えば人間環境学科アドミッション・オフィス入試を経て入学した学生が、平成 26 年度日本生態学会大会においてポスター賞（優秀賞）を受賞し《資料 25》、他の学生に対して刺激を与えるなど教育的効果を生んでいる。

《資料 7：神戸大学及び発達科学部アドミッション・ポリシー》

<p><b>神戸大学が求める学生像</b></p> <p>神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。</p> <p>これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生</li> <li>2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生</li> <li>3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生</li> <li>4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生</li> </ol>
<p><b>発達科学部が求める学生像</b></p> <p>発達科学部では、乳幼児期から高齢期に至るまでの人間の発達及びそれを取り巻く環境について、様々な側面から教育研究を行っています。そして、人間の発達や環境に関する諸問題をとらえ、解決するための専門的知見と問題解決能力を養成することを目指しています。そのために、次のような学生を求めています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間の発達やそれを取り巻く環境に興味をもち、人間形成、人間行動、人間表現、人間環境のいずれかの視点から、新しい学問領域を開拓する意欲のある学生</li> <li>2. 人間の発達や環境に関する現代的課題に主体的にかかわることを希望する学生</li> <li>3. 高等学校等までの基礎的学力を幅広く身につけており、専門的な知識を積極的に学んでいける学生</li> <li>4. 自ら問題を発見し、その問題を多面的にとらえて考察し、自分の考えをまとめる基礎的な能力を有する学生</li> </ol> <p>以上のような学生を選抜するために、発達科学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では学科および募集単位により「国語」「外国語」「数学」「理科」「実技検査」（後期日程にあつては、「数学」「小論文」）を課すことにより、理解力、読解力、語学力とともに、課題解決能力、論理的思考力、科学的知見、表現能力等を測ります。</p>

《資料 8：入学者選抜方法と入学定員》

学科	入学定員	一般入試		A0 入試	社会人入試	私費外国人留学生特別入試	編入学入試
		(前期)	(後期)				
人間形成学科	90	65	20		5	若干人	10
人間行動学科	50	36		12	2	若干人	

人間表現学科	40	32	6		2	若干人
人間環境学科	100	65	25	5	5	若干人

本学部では、教育研究水準の向上を目的として自己評価委員会を設置し、授業のピア・レビュー実施などを含む自己点検・評価に関わる資料の収集、分析及び評価、年次報告書の作成などを行なっている《資料9》。教育内容の充実を図る任務は教務委員会を中心として、学生委員会の他、具体的課題に応じて、国際交流委員会、キャリア・サポートセンター運営委員会、発達科学部教員養成機関審査委員会等と連携をとりながら行なっている。

《資料9：自己評価委員会規程（抜粋）》

（目的）

第2条 委員会は、本研究科等の教育研究水準の向上を図り、本研究科等としての社会的使命を達成するため、本研究科等における教育研究活動の状況について、自らの点検・評価を推進することを目的とする。

ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という）については、学部執行部が中心となり企画・実施する体制をとっている。教授会の開催にあわせて実施することで、多くの教員が参加している《資料10》。この他、新任教員に対しては、情報メディア委員会が、教務情報システム等を含むICTに関する研修を実施している。

FDとその効果の事例として、全学共通教育ベストティーチャー賞（平成22、23、24、25年度）を受賞した本学部教員による講演が行なわれ（平成24年9月）、学生から高い評価を受ける授業のあり方についての情報共有が行なわれ、授業方法等の改善に活かされた。また、キャンパス・ハラスメント（平成25年2月）や、情報セキュリティ（平成25年4月）に関する講習など、大学教育の場で生じうる問題と対策に関する取組が行なわれ、これらの事案発生の予防に効果をあげている。

《資料10：平成26・27年度発達科学部FDのテーマと参加者数（人間発達環境学研究科と合同）》

開催日	テーマ	参加者数	開催日	テーマ	参加者数
26/4/18	教員活動評価の実施について	94	27/9/11	科研費申請のポイントとメリット	83
26/6/20	論文チェックソフト（iThenticate、コピペルナー）の利用方法について	86	27/10/16	初年次セミナー・アクティブラーニングについて	81
26/9/12	企業採用選考時期の変更に関して	76	27/11/20	「発達障害を抱える学生を支援する教職員のための発達障害セミナー―来年4月の障害者差別解消法の施行に向けて―」	76
26/10/17	神戸大学学修管理システム（BEEF）について	84	28/2/5	「神戸大学基金」について	79
26/11/21	発達科学部の魅力と特長	78	28/2/19	「障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制」	80
27/1/16	「神戸大学基金」について	82			

なお、平成24年には、発達科学部創設20年を期に、神戸大学発達科学部卒業生3,450名を対象としたアンケートを実施し、卒業生の視点から見た教育内容・体制等への評価を調査し、学部教育の客観的把握と以降の教育活動等に活用した。具体的事例として、アンケートにおいて「今後に期待すること」として比較的多くの回答があった「就職・進学への支援の充実」、「施設・設備の充実」、「国際性の促進」などの課題に対して、それぞれ、

キャリア・サポートセンターの活発な支援の展開、耐震補強工事に伴う建物・諸設備の更新及び環境整備、文部科学省「グローバル人材育成推進事業」等を通じた国際交流の展開などの取組が進められた。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

基本的組織の構成については、教育目的に基づき、社会・学術の動向を踏まえて適切な教育を実施するために適宜見直しが行なわれている。教員組織についても教育目的を達成する上で質的、量的に十分な体制が確保され、適切な配置がなされている。入学者選抜についてはアドミッション・ポリシーに基づき多様な選抜を実施している。また、内部質保障及び教育の改善を推進する体制は充実しており、教育水準向上の取組も組織的に進められていることから、本学部の教育の実施体制は期待される水準にあると判断する。

## 観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

本学部における学位授与の方針は、「発達科学部学位授与の方針 (DP)」として明確に定められ、社会及び学生に対して明示されている《資料 11：発達科学部学位授与の方針》。

教育課程は DP に基づいて策定された「教育課程の編成及び実施の方針」(CP) に基づいて体系的に編成されている。CP は、学科ごとの授業体系表を含めて公開・明示されている《資料 12：発達科学部カリキュラム・ポリシー》。

本学部の教育課程は「全学共通授業科目」及び「専門科目」で編成されている。学部の専門科目としては、1 年次に学部共通科目、共通専門基礎科目を配置し、2－3 年次には、コース専門科目と学科共通専門科目とを配置している。4 年次には主として卒業研究に取り組む。すなわち、低学年次に人間の発達と環境に関わる幅広い視野の涵養を図る科目を配し、学年進行に伴い漸次専門性を高めてゆく科目配置となっている。必修科目、選択必修科目、自由選択科目は、学科・履修コースの専門性やその段階に応じてコースごとに指定し、また実験・演習などの実践的科目、課題解決型の科目を配置している。(授業科目の代表的事例は《資料 13：授業科目の代表的事例》参照。)

授業形態は、講義、演習、実験等からなる。科目数の上では人間形成学科は講義科目 75%、演習 25%、人間行動学科は講義科目 60%、演習 30%、実験・実習 10%、人間表現学科は講義科目 70%、演習 (実技を含む) 30%、実験等 2.9%、人間環境学科は講義科目 75%、演習 10%、実験・実習等 15%となっており、各学科の特色にあった配分となっている。

本学部では、特に少人数対話型の教育を重視している。授業クラスの 45%が 20 名以下、70%以上が 40 名以下という少人数で実施されており (平成 26 年度)、グループ・ワークやディベートを含むアクティブ・ラーニングの手法を用いた授業が展開されている。

また、主体性や実践性への意識を喚起するため、学外で活躍する多様な人々を招き特別な体験や知見を学生に直接伝えるゲストスピーカー制度を設け活用している《資料 14》。平成 26 年には学部授業科目で 66 件の利用があった。

《資料 11：発達科学部学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)

(神戸大学ホームページ 及び 2015 年度発達科学部学生便覧より)》

神戸大学発達科学部は、広い知識と豊かな教養を授けるとともに、乳幼児期から高齢期に至るまでの人間の発達及びそれを取り巻く環境について様々な側面から教育研究し、これらに関する専門的知見及び問題解決能力をもった、自律的な人材の養成を目指す。

#### 学位授与の要件

本学部で定めた期間在学し、本学部の教育目的に沿って設定された授業科目を履修し、基準となる単位数を修得することが、学位授与の要件である。修得すべき授業科目の中には、講義、演習、実験、実習、実技及び卒業研究が含まれる。

#### 課程修了の目安

人間の発達及びそれを取り巻く環境についての専門的知見並びに問題解決能力を備え、自律的な人間として行動できる人材となっているかが、本学部での課程修了の目安となる。

#### 人間形成学科

人間形成学科に在籍する学生が卒業までに達成を目指す目標は次のとおりとする。

- 人間の誕生から高齢期に至るころ及び諸能力の発達並びに人間形成に関わる諸要因について、社会的及び文化的な観点から専門的な知識を身につける。
- 人間の形成をめぐる諸課題に対して、個別専門領域にとどまることのない包括的、学際的な問題解決能力を身につける。

#### 人間行動学科

人間行動学科に在籍する学生が卒業までに達成を目指す目標は次のとおりとする。

- 人間の発達と行動について、健康発達、行動発達、身体行動の観点から幅広い学際的な知識を習得し、各ライフステージにおける多様な人間行動を科学的に考察する洞察力を身につける。
- 人間の生涯発達における、心身の健康、加齢と適応、身体活動や運動の実践に関する専門的知識を習得するとともに、諸課題に対して実践的に取り組む問題解決能力を身につける。

#### 人間表現学科

人間表現学科に在籍する学生が卒業までに達成を目指す目標は次のとおりとする。

- 人間の創造的表現に関する理論的・実践的な関心を問題化し、探求することで、人間の表現活動に関する鋭い洞察力と創造力を身につける。
- 人間の多様な表現形式の壁を越えた複眼的なアプローチと連携を通じて、新しい表現と価値を生み出す能力を身につける。

#### 人間環境学科

人間環境学科に在籍する学生が卒業までに達成を目指す目標は次のとおりとする。

- 人間の発達を支え、助け、促すための環境のあり方について、多様な学問分野を横断する幅広い研究視点・方法を身につける。
- 実験、フィールドワーク、シミュレーション、情報・統計分析、文献調査などの多彩な研究活動を通じて、考察する力を持ち、問題解決に向けて実践的に挑戦できる能力を身につける。

#### 《資料 12： 発達科学部カリキュラム・ポリシー（神戸大学ホームページより）》

発達科学部では、本学部の「教育目標」及び「学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」に基づき、以下の方針のもとに体系的なカリキュラムを編成する。

1. 乳幼児期から高齢期に至るまでの人間の発達及びそれを取り巻く環境について様々な側面から教育研究する本学部の目的を実現するために、これまでの学問研究の成果を踏まえ、かつ発達と環境に関わる諸課題に対する学際的視点から、学部を4学科、13履修コース（学科共通の発達支援論コースを含む）に分けて、学生をいずれかのコースに分属させ、少人数による教育を行う。
2. 人間の発達及びそれを取り巻く環境に関する専門的知見は、それぞれの学問分野における高度に専門的内容を深めると同時に、分野横断的に学んでいくことで修得されるものである。そのため、本学部では、学部共通科目ならびに学科共通科目を開設して、それぞれの問題領域を考えていく基礎となる知識と専門的な知識とを有機的に結びつけた体系的なカリキュラムを編成する。
3. 人間の発達及びそれを取り巻く環境をめぐる現代的な問題は、これまでの学問分野における基礎的方法論をしっかりと身につけた上で、それぞれの問題をとらえ直す共同的な営みによって解決の糸口が得られる。こうした問題解決能力を養うために、本学部では、それぞれの学問分野の基



礎的方法論や技能・技術を修得させるとともに、教員と学生ならびに学生同士の対話に基づいた教育活動や、卒業研究に向けた丁寧な指導体制を用意する。

4. 以上のような観点に留意して、教育課程を編成・実施することで、専門的知識と問題解決能力をそなえた自律的な人材を養成する。

○ 学科別 カリキュラム・ポリシー

・人間形成学科

1. 人間の誕生から高齢期に至るころ及び諸能力の発達並びに人間形成に関わる諸要因について、社会的及び文化的な観点から教育研究を行う本学科の目的を実現するために、心理発達論、子ども発達論、教育科学論、学校教育論の各コースに学生を分属させ、各教員の特性を活かした少人数教育を重視しつつ、専門領域に関する知識を体系的かつ深く修得できるようなカリキュラムを準備する。
2. 人間の形成について、個別専門領域のみにとどまることのない包括的な知識を修得させるために、学部共通科目と関連させながら、あるいはその基礎の上に学科共通科目を開設して、心理発達、子ども発達、教育科学、学校教育に関する基盤の科目を学科所属の学生全員に履修させる。そのことによって、人間形成に関わる諸学問を有機的に結びつけつつ、学際的な課題意識、接近方法、専門知識等の修得を目指す。
3. 人間の形成をめぐる現代的諸課題に対する問題解決能力を養うために、各専門領域における調査手法・研究方法等について、基礎的段階から応用的発展的段階へと円滑に学ぶことができる綿密かつ体系的なカリキュラムを準備する。これらの科目においては、学問における共同的な営みの重要性に鑑み、教員と学生ならびに学生同士の対話に基づいた教育活動や、卒業研究に向けた丁寧な指導体制を用意する。
4. 以上のような観点に留意して、教育課程を編成・実施することで、ころ及び諸能力の発達、人間形成の社会的文化的要因に関する専門的知識と問題解決能力をそなえた自律した人材を養成する。

・人間行動学科

1. 人間の行動と発達について、自然科学及び人文・社会科学の面から総合的に教育研究を行うという本学科の目的を実現するために、人間行動に関する諸科学の体系に従って広範な知識を授けるとともに、健康発達論コース、行動発達論コース、身体行動論コースの3つの履修コースを設定し、学生をいずれかのコースに分属させ、少人数による教育を行う。
2. 人間の行動は複雑かつ高度化し、基礎となる諸学問分野において高度に専門的知識を深めると同時に、分野横断的に人間行動を学んでいくことが不可欠である。そのため、本学科では、人間行動に関する学際的な知識を涵養する学科共通科目を開設するとともに、各コースの専門科目に他コースの科目を共有することにより、それぞれの問題領域を考えていく基礎となる知識と専門的かつ学際的な知識を有機的に結びつけた体系的なカリキュラムを用意する。
3. 人間行動に関する現代的な問題は、これまでの学問分野における専門的知識をしっかりと身につけ、さらにそれぞれの問題をとらえ直す実践的な営みによって解決の糸口が得られる。こうした専門的知識と実践的な問題解決能力を養うために、本学科の各コースでは、専門的知識の修得にいくつもの学習目標を設定するとともに、問題解決能力の育成においては、研究能力と実践的能力の修得を目指すカリキュラム体系を導入する。
4. 以上のような観点に留意し、さらに教員と学生ならびに学生同士の対話に基づいた教育活動や、卒業研究に向けた丁寧な指導体制を用意することで、専門的知識と問題解決能力をそなえた自律した人材を養成する。

・人間表現学科

1. 私たち人間は、長い歴史にわたって、その時々々の環境のもとで様々な表現を行い、その時代に固有の文化を生み出してきた。とりわけ、音楽や造形、舞踊といった文化的形態での創造的表現は極めて人間的な行為であり、人間の発達や変容にとって欠かすことのできない重要な営みである。人間表現学科では、こういった人間の創造表現の本質を、表現に関わる文化や創造実践、またそれらの基盤となる感性といった多様な視点から総合的・学際的に探究する。
2. 学生は、1年次から、人間の創造表現に関する概論を中心とする第1群（文化・芸術に関する横断的科目）をバランスよく履修し、人間の表現に関わる問題群へアプローチするためのさまざまな考え方や方法を多面的に学ぶ。こうした一連の学習を通じて学ぶ方向性を見定めながら、2年次からは第2群（文化・芸術に関する専門的科目）の履修を通じて、人間の表現に関わるより専門的な課題に対する洞察を深めていく。このように、人間表現学科では、人間の創造表現の本質に関して、多様な視点による総合的かつ柔軟な探究ができるような有機的カリキュラムが提供されている。

3. 学生は、3年次より各研究室に配属される。多様な横断的、専門的科目群の履修を通じて先鋭化された各々の興味・関心に沿い、「表現すること」を通じて、あるいは「表現することの意味」や「表現する行為そのもの」、「表現されたもの」の探究を通じて、人間表現に関わる卒業研究に取り組んでいく。また、学科必修科目として設定された「人間の発達と表現演習」において、学生による研究の相互理解を深めるとともに、個々の研究課題に即した問題解決能力を養うことによって質の高い卒業研究の達成を目指す。
4. 以上のような観点とカリキュラムをもとに、学生・教員同士のコミュニケーションを通じて、主体的な学びの促進を図ると同時に、人間表現に関する専門的知見と問題解決能力を備えた自律的な人材を養成する。

#### ・人間環境学科

1. 人間環境学科は、人間発達のあり方に関わる環境の諸問題を、自然科学・人文社会科学の枠、従来の分断された学問領域を超えて総合的に追究しうる能力を育てることを目標としている。学生は、1年次に学科単位で人間環境に関わる基礎的な知識を広く修得する。2年次に4つのコース（自然環境論、数理情報環境論、生活環境論、社会環境論）に振り分けられ、主としてコース単位で学習を進める。3年次以降ゼミに配属され、さらに少人数教育のなかで研究をより深めるとともに、学んできた知識を再び人間環境学として統合する。4年次には指導教員の下で、各人のテーマに基づく卒業研究に取り組む。
2. 学生は以下のカリキュラム構成の中で学習を深めてゆく。1年次に学科共通科目を履修し人間環境学科の概要的知識を得る。また、4つのコースに関わる研究基礎（概論）を学ぶ。2年次より所属各コースに応じた専門科目を学ぶだけでなく、人間環境研究の実践的手法について修得する。3年次にはより細分化された専門性を磨くと同時に、人間環境学として知見を再度統合するために学科共通科目を履修する。こうした過程をへたうえで創造的研究の総括として4年次に卒業研究を仕上げる。
3. 以上のカリキュラムを通じて、学生は人間発達に関連する諸環境につき、従来の視野にとらわれない幅広い知見を身につける。同時に、人間環境学は新しい問題設定領域であるため、学生には主体的創造的な知的作業が求められ、その過程を通じて学問上のみならず実社会においても要求される問題解決能力が涵養される。

#### ・発達支援論コース

1. ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの5部門（労働・成人教育支援、子ども・家庭支援、ジェンダー研究・学習支援、障害共生支援、ボランティア社会・学習支援）で実施されているアクションリサーチ（実践的研究）への参加を通して、多層多元的な社会セクター（NPO・NGO、企業、行政など）との連携や複数の学術領域の横断的つながりの重要性を理解し体現しえる「新しいタイプのジェネラリスト」の養成をねらいとする。
2. 学生は、一定の履修要件を満たしたのち、3年次進学時において学部内のどの学科からも編入することが可能である。2年次までに培った本学部の他コースの専門的知見を基礎に置きながら、その応用・発展を実践フィールドにおいて体験する。実際の場面において生じるさまざまな課題を発見・考究するとともに、その解決に資する理論や実践的方策を身につけてゆく。
3. 学生は、原則として、本コースが開講する演習のうち、少なくとも2つを履修する。領域の異なるフィールドへの参加を経験することによって、実践の内容・手法の異同を確認し、多様な支援の技法・原理を修得する。演習では、フィールドワークだけではなく、実践に関係する文献の講読・討議、ワークショップ形式による企画創成やリフレクションなどを行い、学生の主体的な学習を支援する。
4. 発達科学部の多様な授業リソースを最大限に活用できるようにするために、コース固有の授業のしばりをできるだけ少なくしている。指導教員や副指導教員体制（他コース教員も含む）と相談しながら、学生は、他コース開講科目を含む多様な授業科目の中から学習目標に適合した授業を選択し、各自のカリキュラムを作成する。卒業研究では、こうした学科横断的かつ臨場的な研究コミュニティのなかで、「仮説の構築→実践→省察→新たな知見の発見・新しい実践の創出」というサイクルに基づいた実践的研究の成果をまとめる。

#### 《資料 13：授業科目の代表的事例》

##### 「発達科学への招待」（1年次の学部共通科目（必修））

1年次の学部共通科目（必修）「発達科学への招待」は、人間の発達とそれを支える環境を対象とする発達科学研究について、実践性、手法、学際性の観点から紹介し考察する3モジュールで構成し、学生の視野を広げ「発達科学」という新しい学問創造へと誘う内容となっている。最後の授業では、

学生自身が主体的にテーマや内容を企画し実施する総合討論が行なわれる。

《「発達科学への招待」 シラバス》

**開講科目名**：発達科学への招待

**開講区分**：前期

**担当教員**：白杉 直子

**単位数**：2単位

**授業のテーマと到達目標**

学部必修科目。発達科学とは何か、発達科学部で何をどう学ぶか、勉強と研究との違いは何か、大学での学びはどうあるべきか、教員と学生がいくつかのテーマを通して、共に考え合う。人間の発達とそれを支える環境について広く、深く考えたい。

**授業の概要と計画**

授業は3つのモジュールにより構成される。モジュールAでは「発達科学研究の実践性」、モジュールBでは「発達科学研究の手法」、モジュールCでは「発達科学研究の学際性」をテーマに、10余名の教員が講義を行う。モジュールAの後にディスカッションの時間を設け、教員が対談などを行う。最終の授業では、学生主体のミニシンポジウムで全体のまとめを行う。

第1回 ガイダンス(B202)

ミニ講演「発達科学部で学ぶとは？ —繋がる力・繋げる力—」澤宗則(人間環境学科 社会環境論コース)(B202)

第2-5回

【モジュールA】発達科学研究の実践性(F256,F264)

「ESDの課題と展望」松岡広路(発達支援論コース)

「スクールカウンセリングの理論と実際」吉田圭吾(人間形成学科 心理発達論コース)

「ライフステージに応じた身体づくり 運動・健康・糖尿病・認知症」高田義弘(人間行動学科 身体行動論コース)

第6回 [合同討論] モジュールAを振り返って(B202)

第7-9回

【モジュールB】発達科学研究の手法(F256,F264)

「ナラティブ・アプローチ」目黒強(人間形成学科 子ども発達論コース・学校教育論コース)

「実験・調査結果に客観性を」阪本雄二(人間環境学科 数理情報環境論コース)ほか

第10-13回

【モジュールC】発達科学研究の学際性(F256,F264)

「学際性とメディア論 環境問題を素材にして」田畑暁生(人間表現学科 表現文化論コース)

「茶園の窒素溶脱問題の食環境学的アプローチ」白杉直子(人間環境学科 生活環境論コース)

「人間発達環境学への志向」渡部昭男(人間形成学科 教育科学論コース・学校教育論コース)

学外からのゲストティーチャーによる講義も企画している。

第14回 学生による[総合討論]準備のための討論会

第15回 学生による総合討論

**成績評価と基準**

出席と授業への参画を重視して、評価する。

毎回の授業で、小さな感想や授業について考えたことを書く時間を設定し、それらに対しても評価する。

授業全体を通した、まとめのレポートの提出を求める。レポートは、根拠を示しているか、自分の頭で考えたか否かという側面を重視して評価する。

**履修上の注意(準備学修・復習、関連科目情報等を含む)**

授業は、ガイダンスや討論会ではB202の大教室に全員が会するが、各教員による講義では、学生番号の末尾が奇数の組と偶数の組の2クラスに分けて行う。このように、教室が日により変わるので、注意が必要。勝手に教室を変えて受講すると欠席とみなす。

テキストを予習や復習に活用してほしい。

討論会準備やレポート課題などの重要なアナウンスは、ウェブ上のうりぼーネットの掲示板を通じて行う。口頭では説明しない内容も、掲示板に掲載することがしばしばあるので、掲示板を必ず自分で見る習慣をつける。

**オフィスアワー・連絡先**

(省略)

**学生へのメッセージ**

さまざまな問題に対して自分で考えるトレーニングを積もう。

教員とはもちろんですが、この授業が学生同士でお互いに刺激でき合う場になれば幸いです。

**「生涯学習論」(2年次の学科共通科目(人間形成学科))**

人間形成学科の「生涯学習論」は、学校を中心とした近代教育のパラダイム転換につながる生涯学

習論の全体的把握を目指す内容で、150名程度の受講者であるが、少人数トークセッション、グループワーク、ディベートなどを組み込み、アクティブ・ラーニングを根本にすえた授業スタイルをとっている。また、生涯学習に関連する活動を紹介しつつ、学習関連施設訪問や関連活動への参加を促進し、生涯学習理論の修得と共に、学生の体験的学習を重視している。

《資料 14：「2015 年度ゲストスピーカー制度の運用について」（抜粋）》

2015 年度ゲストスピーカー制度の運用について

教務委員会

ゲストスピーカーとは、本学部担当教員（以下担当教員という）の担当する授業科目において、半期 15 コマの授業中に 1 回ないし 2 回程度、その授業科目内容をより効果的に学生に教授できる人材を登用し、その回の授業の一部を担当させるものである。

ゲストスピーカー制度を、平成 27 年度については、次のように運用する。

1. 一つの授業科目に対して、半期に 2 回を限度とする。また、各授業時間において、担当教員の紹介の後、ゲストスピーカーは 60 分程度の講義を行い、最後に、担当教員の司会による質疑応答や担当教員によるまとめなどを行うものとする。

（以下略）

この他、ティーチングアシスタント（TA）については、演習・実験科目を中心に適宜配置し、大きな教育効果を収めている《資料 15》。

《資料 15：TA 採用実績（平成 26 年度；単位：人）》

学科	講義科目	演習・実験科目
人間形成学科	13	21
人間行動学科	10	29
人間表現学科	8	19
人間環境学科	18	115

シラバスは、全てウェブサイト上に公開しており、担当教員名、授業のテーマと到達目標、各回の授業内容、成績評価方法・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報等を掲載し、自主的な学習を含めて、学習の便宜を図っている《例として資料 13 内「発達科学への招待」シラバス》。

学習環境面では、学生の自主学習に資する施設として図書館、情報教育設備室等を整備し、開放している。さらに、自主学習に加えて、グループ学習や討論の場としても活用できる複数のラーニングコモンズ・スペースを設けており、可動式大型モニターや移動式ホワイトボードの設置など、機能充実に努めている。

その他、単位の実質化を保障する仕組みの一つとして、1 年間に学生が履修科目として登録できる単位数の上限を 49 単位とするキャップ制を採用し、学生が各年次にわたって十分な学習に取組み、適切に授業科目を履修するよう促している《資料 16、17》。

《資料 16：「神戸大学発達科学部規則」（抜粋）》

神戸大学発達科学部規則（抜粋）

（履修科目の登録の上限）

第 7 条 教学規則第 29 条第 1 項の規定に基づく履修科目の登録の上限は、通年においては 49 単位、各学期においては 30 単位とする。ただし、特別の事情がある場合はこの限りでない。

《資料 17:「履修方法及び履修に関する心得」(抜粋)(2015 年度発達科学部学生便覧より)》

(1)履修のあり方について

①単位制度の考え方について

神戸大学では、各授業科目の単位数は、授業時間外の勉強時間も含めて、45 時間の学修を必要とする内容をもって 1 単位の授業を構成することとなっています(神戸大学教学規則第 32 条)。その原則に基づいて、本学部では、授業形態に応じて授業時間あたりの単位数を定めています。例えば、講義および演習については、15 時間の授業をもって、実験や実習等については、30 時間の授業をもって 1 単位とすると定めています(本学部規則第 5 条)。

このことから、例えば、2 単位の講義科目では、30 時間分の授業を設定することが標準となっていますが、その授業科目の単位が認定されるには、合計 90 時間分に相当する学修が必要ということになります。学生諸君の中には、授業に全部出席すれば、それだけで単位が自動的に修得できるものと誤解している人もいるかもしれませんが、そういう認識は改めてください。授業時間に加え、自分自身での勉強の時間なども含めて、90 時間分の学修の成果を測る試験に合格して、初めて 2 単位が修得できるものと理解してください。本学部では、その判定を厳正に行うように努めています。

②年間に履修できる単位数の上限について

本学部では、1 年間に履修できる単位数の上限を設けています(本学部規則第 7 条)。これは、上で述べた単位制度の考え方に基づくと、1 週間に一人の人が勉強に使える時間に上限があるので、その上限を超えて勉強するような計画を立てても、その実現は物理的に不可能なことがわかっているからです。しかし、中には、非常な努力をして、膨大な勉強時間を使ってでも多くを学ぼうとする人もいます。その可能性を全くふさいでしまわないために、本学部で設けた履修単位の上限の設定は比較的ゆるやかなものにしてあります。しかし、それだからといって、むやみに可能な上限ぎりぎりまでの単位数の履修登録をすることは、意味がないばかりか、無謀だといえます。一人一人、自学自習の時間も考慮に入れた学習計画に基づいて、授業科目の履修申請を行うようにしてください。

自主学習を促すために、各履修コースの各学年に一人の担当教員を置き、学力を把握しながら種々の相談に応じられる体制をとっている。また、3 年次または 4 年次から開始する卒業研究指導教員は、単位修得状況の確認、学習相談、進路指導等も行う。その他、学科ごとに、入学時のオリエンテーションや各学年での履修ガイダンス、コース指導、卒業研究指導を基本に、4 年次には卒業研究発表会(公開)が実施されている。

さらに、本学部では、HC センター、サイエンスショップ等を活用し、学生が正課内外で社会と関わる活動を展開し、主体的に学び成長する機会が提供されている(「Ⅲ「質の向上度」の分析」5-23、(1)事例②参照)。

(社会からの要請に応える教育の展開)

本学部では、持続可能な社会づくりなど、社会からの要請等に対応した教育課程の編成に配慮して、《資料 18》のような取組を実施している。

《資料 18: 社会からの要請に応える教育の展開》

【発達支援論コース】

本学部の特徴ある教育として、「ヘルスプロモーション」、「子ども・家庭支援」、「ボランティア社会・学習支援」、「障害共生支援」等、社会的要請の高い課題領域に関わる教育を、HC センターの活動と連動する形でアクション・リサーチ等の方法を通じて行なう発達支援論コースが設置されている。このコースは他の履修コースと異なり 3 年次から所属するコースで、全ての学科・履修コースから進学でき、学科・コースの枠を越えて学部の全科目から履修科目を選択できる。

《履修方法及び履修に関する心得・発達支援論コース 抜粋》

発達支援論コースは、どの学科にも属していない、学科横断のユニークなコースです。全ての学科から、実践的研究に関心のある学生が進学することができます。このコースでは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「ジェンダー研究・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」の 6 つのうちのいずれかを主に選択して学び、地域のさまざまな活動と結びついた臨床的、実践的研究を行います。発達支援論コースの大きな特色のひとつは、学部で開講されるほとんどの授業を自由に選択して履修できることです。

このコースでは、発達科学部の豊富な資源を活用しながら、新しい時代に挑む幅広い教養・知識・技能を身につけることで、応用的な学問領域と、発達に関わる個人・地域・学校・企業・NPOなどの実践とを橋渡しできる専門家を育てます。学問と実践との接点で、臨場感溢れる研究を指向していますので、時代のニーズに適った新しい学問が生まれる息吹を感じることができるでしょう。

(2015年度発達科学部学生便覧より)

### 【ESD サブコース】

神戸大学 ESD コースは、「持続可能な社会づくり」に関わる知見を社会の実際の間をフィールドとし、アクション・リサーチ等を共通の手法として主体的に学ぶことを目的とする領域横断型の特徴あるコースで、神戸大学の7学部が関わり、本学部がハブとしての役割を果たしながら協働して運営している。本学部学生は、4学科に設けられた各専門領域の履修コースに加えて、このコースを選択履修できる。

《神戸大学 ESD コース実施要領（抜粋）》

#### 神戸大学 ESD コース実施要領

(趣旨)

第1 神戸大学発達科学部、文学部、経済学部、農学部、国際文化学部、工学部及び医学部（以下「7学部」という。）に各学部規則等の規定により神戸大学 ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) コース（以下「コース」という。）を置き、その実施に 関し必要な事項を定める。

(設置目的)

第2 コースは、各学部がアクション・リサーチ等を共通の手法としながら各学部間及び学内外の組織と連携して、持続可能な社会づくりに資する人材を養成することを目的とする。

(以下略)

### (国際通用性のある人材育成に向けた教育の展開)

文部科学省「グローバル人材育成推進事業」採択等を通じた教育の国際化の取組：

(「Ⅲ 「質の向上度」の分析」5-23 頁、(1) 事例①参照)

### (学生の多様なニーズへの対応)

他学部及び海外を含む他大学の授業科目の履修：学生の多様な学習意欲・関心に応える趣旨から、自由選択科目として、他学部の科目の履修を認めているほか、協定している他大学等（海外の大学を含む）の授業科目を履修することができる《資料 19》。海外の大学とは大学間協定が 19 校、部局間協定が 14 校と締結されており留学者の派遣、受入れが行なわれている《資料 20、21》。

この他、入学者選抜における第3年次編入学及び社会人入学制度も、社会の多様な学習ニーズに対応するものである。

《資料 19：発達科学部規則 抜粋（2015年度発達科学部学生便覧）》

(授業科目の履修)

第8条 学生は、毎学期指定の期日までに、所定の履修届を提出し、学部長の許可を受けなければならない。

2 卒業研究の履修については、指導教員の承認を受けなければならない。この場合においては、第3年次の終わりまでに所定の単位を修得していなければならない。

3 他学部の授業科目の履修については、学部長を経て、当該学部長の許可を受けなければならない。

(他の大学又は短期大学における授業科目の履修)

第9条	学生は、神戸大学発達科学部教授会（以下教授会という）の議を経て、本学部と協定している他の大学又は短期大学（外国の大学または短期大学を含む。以下同じ）の授業科目を履修することができる。
2	前項の規定にかかわらず、やむを得ない事情があるときは、学生は、教授会の議を経て、協定に基づかずに外国の大学又は短期大学の授業科目を履修することができる。
3	前2項の規定により修得した授業科目について修得した単位は、60単位を限度として、本学部において修得したものとみなし、別表第2の必要修得単位数に算入することができる。

《資料 20：発達科学部・人間発達環境学研究科 部局間協定締結校（平成 27 年度）》

国名	大学名
中華人民共和国	北京師範大学
	華東師範大学
	浙江大学
	香港大学
大韓民国	釜山国立大学師範学部
	公州教育大学校及び教育大学院
	ナザレ大学再活福祉大学院
フィリピン共和国	サンペーダ大学
ロシア共和国	モスクワ教育大学
ドイツ連邦共和国	ハンブルク大学
フランス共和国	リヨン高等師範学校
	リール第3大学（予定）
オーストリア共和国	ヨハネスケプラー大学大学院
	FH ヨアネウム応用科学大学
リトアニア共和国	ヴィリニウスゲディミナス大学

《資料 21：協定に基づく海外留学者数（平成 22－26 年度実績）》

大学名	国名	受入れ実績						派遣実績					
		H22	H23	H24	H25	H26	H27	H22	H23	H24	H25	H26	H27
北京師範大学	中華人民共和国		1				1						
華東師範大学	中華人民共和国					2	2						
上海交通大学	中華人民共和国						1						
公州教育大学校	大韓民国	2		1									
ソウル国立大学校	大韓民国	1		1							1		
ロンドン大学 SOAS	連合王国	1				2							1
オーフス大学	デンマーク	2		2	1	1	1		1		1		
ニース＝ソフィア・アンチポリス大学	フランス共和国							2					
カレル大学	チェコ共和国								1				
ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国								1				
ハンブルグ大学	ドイツ連邦共和国											2	
ヤゲウォ大学	ポーランド共和国						1						
モスクワ教育大学	ロシア連邦												1
クイーンズランド大学	オーストラリア連邦												1
ソフィア大学	ブルガリア共和国												1

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

「グローバル人材育成推進事業」採択等による教育の国際化の活発な取組や、人間発達に関わる現代的課題に焦点をあてた発達支援論コース、ESD サブコースなどの教育プログラムは、社会的要請に応える特徴ある活動として高く評価される。また、少人数の授業が

多数を占め、双方向コミュニケーションの工夫など学生の主体的学習を促す学習指導が広く行なわれている。教育課程は体系的に編成されており、社会人入学、編入学の受入れ、国内外の他大学との協定に基づく授業科目履修制度など、多様な学習ニーズへの配慮もなされている。以上の理由から、本学部の教育内容は、期待される水準を上回ると判断する。



## (2)分析項目Ⅱ 教育成果の状況

## 観点 学業の成果

(観点に係る状況)

過去5年平均の標準修業年限卒業率は92.0%、標準修業年限×1.5年以内の卒業率は94.5%となっている《資料22》。留年者数、休学者数、退学者数については《資料23》の通りである。留年者数、休学者数、退学者数のいずれについても、大きな変化は見られない。教育職員免許状をはじめとする各種資格の取得状況については《資料24》の通りである。どの年度も、延べ100名の者が教員免許を取得し、平成25年度以降は学芸員資格の取得者も出てきている。

《資料22：標準修業年限内及び標準修業年限×1.5年内の卒業率》

入学年度	入学者数	卒業者					卒業率	
		標準修業年限内	標準修業年限超過			標準修業年限×1.5年以内	標準修業年限内	標準修業年限×1.5年
			1年	2年	3年			
H19	292	238	34	7	1	279	82%	96%
H20	290	229	34	7	3	270	79%	93%
H21	291	234	37	6	4	277	80%	95%
H22	290	244	29	7		280	84%	97%
H23	290	247	30			277	85%	95.1%
H24	291	253					87%	
H25	289							
H26	291							

《資料23：留年者数、休学者数、退学者数の推移(名)》

年度	留年者			休学者			退学者		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
H22	41	20	61	41	22	63	4	1	5
H23	40	28	68	25	21	46	3	1	4
H24	45	25	70	34	24	58	5	1	6
H25	47	28	75	33	26	59	4	2	6
H26	48	21	69	37	16	53	4	0	4
H27	40	22	62	28	24	52	8	2	10

《資料24：各種免許取得状況》

年度	教育職員免許(一種)																					学芸員		
	実取得人数	幼稚園	特別支援学校	小学校	中学校									高校										
					国語	理科	家庭	社会	数学	音楽	美術	英語	保健体育	国語	理科	家庭	地理歴史	公民	数学	音楽	英語		美術	保健体育
H22	96	25	10	42	0	7	1	7	14	5	1	0	7	0	11	2	6	8	16	5	0	2	7	0
H23	114	36	11	43	0	13	1	12	16	3	3	0	7	0	15	0	11	10	18	7	0	4	7	0
H24	104	28	7	40	0	10	2	3	20	7	3	0	1	0	11	2	6	6	23	8	0	4	8	0
H25	99	22	12	28	0	13	2	5	9	3	11	0	5	0	17	2	9	4	13	4	0	12	8	25
H26	101	25	7	30	0	16	5	7	13	4	8	0	2	0	19	9	7	5	16	11	0	5	2	12
H27	108	23	12	37	0	11	1	9	10	11	1	0	4	0	19	2	10	7	16	15	0	2	6	11

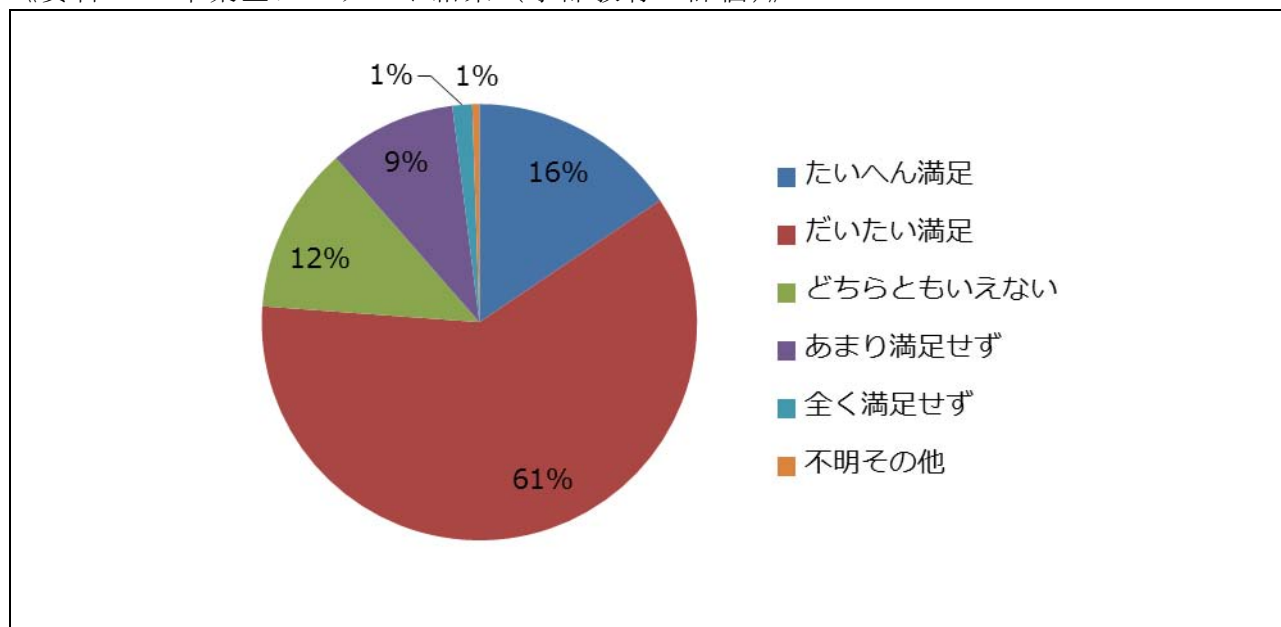
ダンス、絵画、彫刻など芸術領域で、多数の受賞が報告され、在学生のパフォーマンスが高く評価されている他、平成 26 年度は、全国規模の学会での受賞も複数あり、在学生の研究成果ならびに研究発表が評価されつつある《資料 25》。

《資料 25：学生の受賞実績（平成 22 年度～平成 27 年度）》

年度	受賞内容
H23	・タトリン・カンファレンス最優秀作品賞
H24	・「アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ2012～少人数のための創作ダンスコンクール～」にて「松本千代栄賞」(最高賞) ・「座・高田寺ダンスアワード」入選 ・第32回こうべユース賞 ・神戸大学学生表彰
H25	・「アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ2013」特別賞 ・「座・高田寺ダンスアワード2014」入選 ・「横浜ダンスコレクションEX2014」コンペティションⅡ 奨励賞(新人振付家部門) ・第39回こうべ市民美術展・神戸労働者福祉協議会賞受賞(彫刻部門) ・壁画プロジェクト『モトローを歩こう』仮想店舗人気投票入賞(3位)
H26	・第62回日本生態学会大会, ポスター賞最優秀賞 ・第62回日本生態学会大会, ポスター賞優秀賞 ・日本LCA学会, 学生優秀ポスター発表賞 ・2014年ピティナ・ピアノコンペティション グランミューズ部門 Yカテゴリー(高校卒業以上22歳以下)全国大会2位 ・兵庫県展 絵画部門 佳作 ・第2回座間全国舞踊コンクール クラシックバレエ部門 シニアの部第1位, チャコット賞, 座間文化芸術振興会賞, 音楽舞踊新聞賞 ・第2回座間全国舞踊コンクール モダン・現代舞踊・コンテンポラリー部門 シニアソロの部第1位, チャコット賞 ・第2回座間全国舞踊コンクール モダン・現代舞踊・コンテンポラリー部門 シニアアンサンブルの部第2位, マルマン賞
H27	

平成 24 年度に、本学部の卒業生に対して、学部教育ならびに学生生活に関するアンケートを実施した。まず、学部教育についての満足度を問う質問項目において、回答者の 16%が「たいへん満足できた」、61%「だいたい満足できた」と回答し、合わせて 8 割近い卒業生が、本学部の教育内容に満足していることが伺えた《資料 26》。(授業評価に関わる質問項目への回答は、《別添資料 1》参照。)

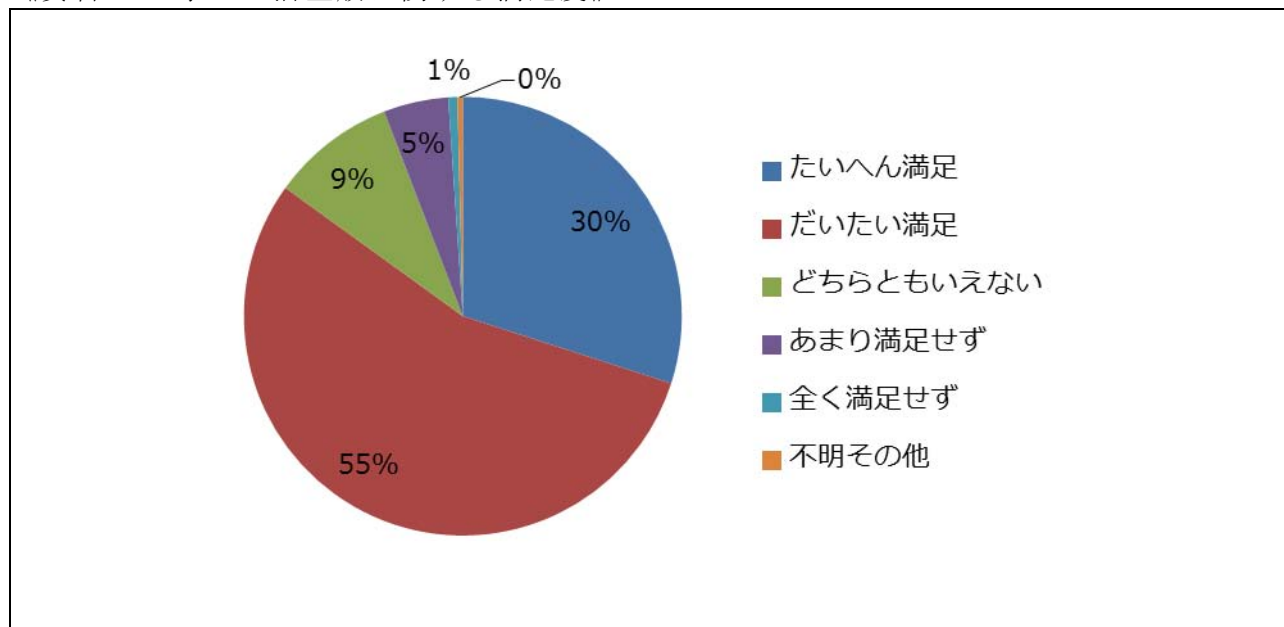
《資料 26：卒業生アンケート結果（学部教育の評価）》



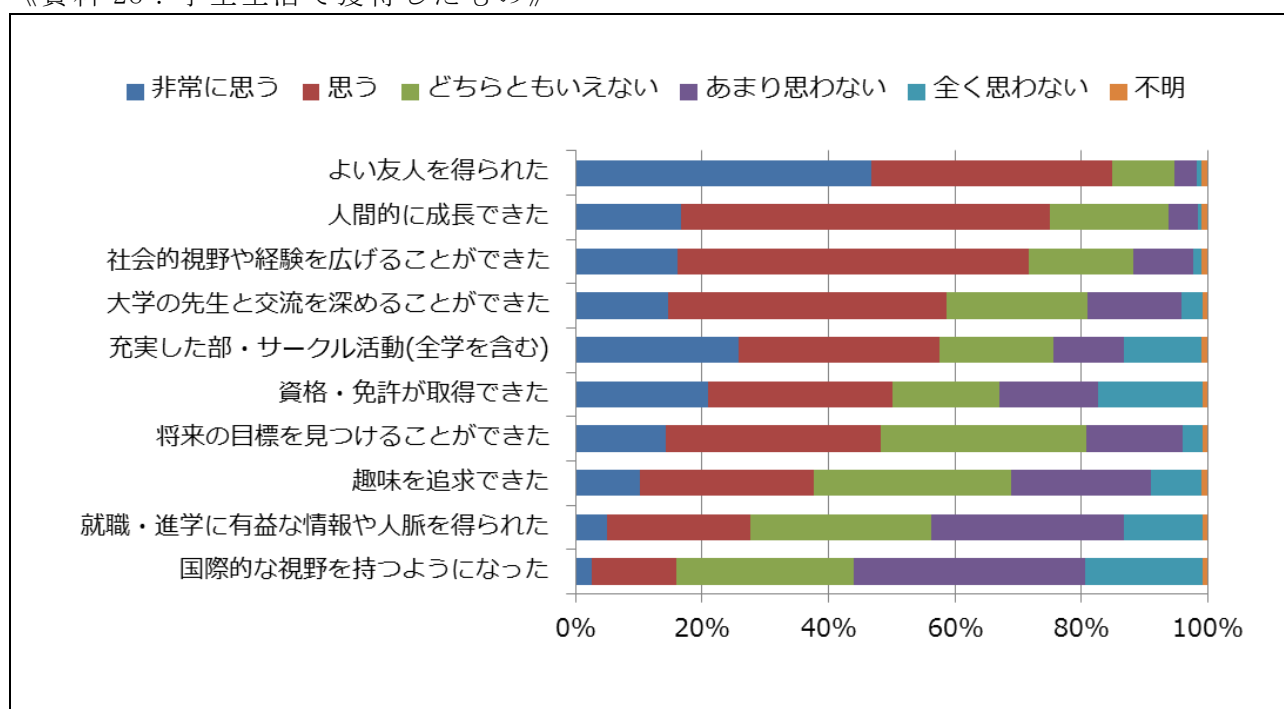
続いて、学生生活全般に関する満足度《資料 27》については、「たいへん満足できた」が 30%、「だいたい満足できた」が 55%と、おおむね肯定的な評価が得られた。学生生活で獲得したもの《資料 28》については、「非常に思う」と「思う」の回答を合算すると、過半数が、「よい友人を得られた」、「人間的に成長できた」、「社会的視野や経験を広げる

ことができた」、「充実した部・サークル活動（全学も含む）ができた」、「大学の先生と交流を深めることができた」と評価している。また、「資格・免許が取得できた」、「将来の目標を見つけることができた」等の評価がこれに続く。

《資料 27： 学生生活全般に関する満足度》

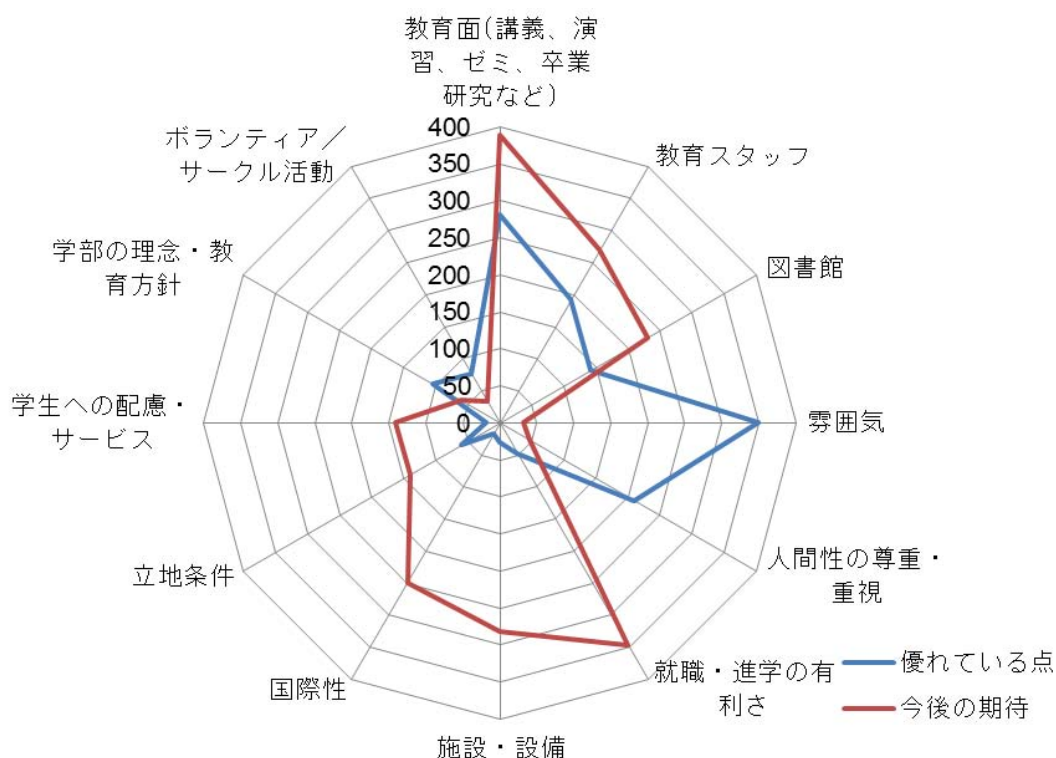


《資料 28： 学生生活で獲得したもの》



最後に、学部教育の優れている点と今後に期待したい点とを比較した結果は《資料 29》のとおりである。

《資料 29：他大学・他学部より優れている点と今後に期待すること》



#### 【読み取れる特徴】

- ・ 優れていると高く評価され、しかも今後の期待がさらに一層大きい要素は、「教育面」、「教育スタッフ」である。「図書館」もこれに準じる。これらはいわば教育の最も基礎・基本となる諸要素である。
- ・ 優れていると高く評価され、今後の期待は比較的少ない要素は、「雰囲気」と「人間性の尊重」である。これらについては、現状への満足度が高いといえよう。
- ・ 優れているとは評価されず、今後への期待のみで多く選択されている要素が、「就職・進学の有利性・支援」、「施設・設備」、「国際性」である。これらの要素は、現状では本学部教育の一種の弱点であり、今後、積極的・意識的な取り組みが求められる諸課題であろう。最後に、優れている点・今後の期待の双方で選択が少ない要素は、「学生への配慮・サービス」、「学部の理念・教育方針」、「ボランティア・サークル活動」等であった。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

卒業率、単位の習得状況、休学者数、退学者数、資格取得の状況から判断して、教育の目的に沿った効果が着実にあがっていると見える。芸術領域における多数の受賞に加え、近年は、全国規模の学会における研究発表の受賞も複数報告され、学部教育の成果が、対外的にも高く評価されていることがわかる。卒業時の成果としては、教育職員免許状や学芸員資格の取得において、例年、一定の成果を上げている。また、卒業生を対象としたアンケート結果においても、学部教育に対する高い満足度と肯定的な評価、学生生活全般に関する高い満足度といった結果が得られている。これらのことから、本学部の学業の成果は期待される水準を上回ると判断する。

**観点 進路・就職の状況**

(観点に係る状況)

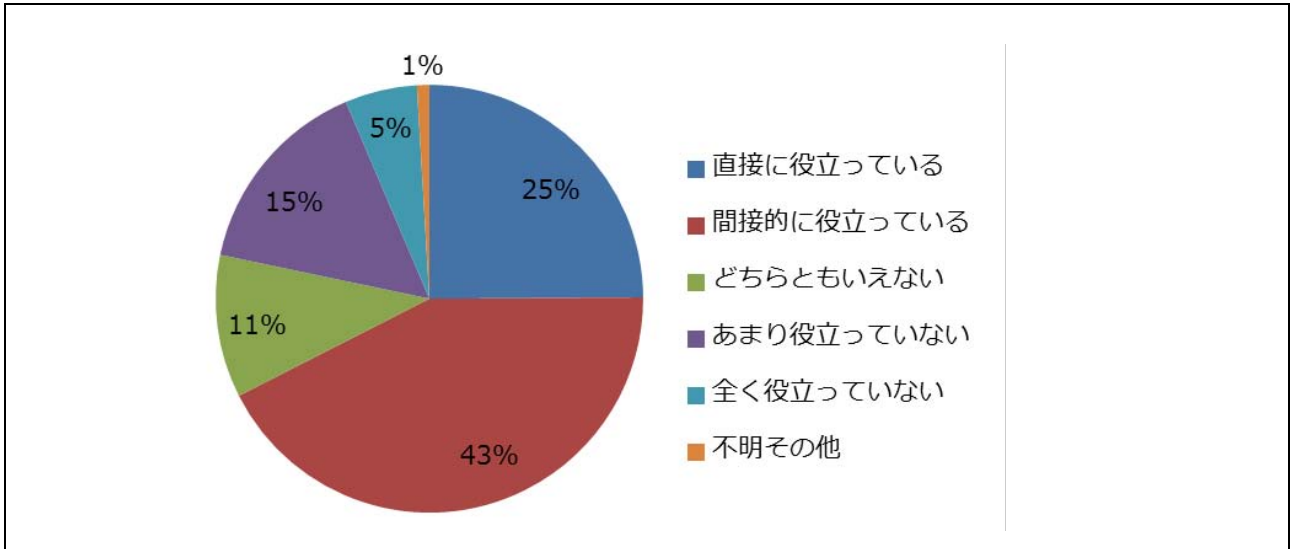
卒業生の就職者数及び進学者数については、《資料 30》のとおりである。各年度における就職率は 6～70%、進学率は平均して 20%弱を占める。就職の中では約 20%の者が教職ないし教育関係の職種につき、公務員は 10%程度である。一般企業の中の職種は、学部の特性もあり、多様である。

《資料 30：学部産業別就職者数、大学院進学者数》

年度		農業・林業	漁業	鉱業・採石等	建設業	製 造 業										電気・ガス・水道	情報通信	運輸・郵便	卸売	小売	金融
						食品・飲料・たばこ	繊維工業	印刷・関連業	化学工業・石油等	鉄鋼・鉄・非鉄金属	はん・産等機械器具	電子部品・デバイス等	電気・情報通信機械器具	輸送機械器具	その他製造業						
27	男	1				2	3	2	2	1	1	1		1	3	1	9	1	2	3	8
	女				2	3	2	2	1					1	2	2	10	2	3	1	16
	計	1	0	0	2	5	2	2	4	1	1	1	0	2	5	3	19	3	5	4	24
26	男				3	6			2		1		4		4	4	7	1	3	4	
	女				2	3		1	3	1	1		4	1	2	1	8	3	1	8	15
	計	0	0	0	5	9	0	1	5	1	2	0	8	1	6	1	12	10	2	11	19
25	男				2	1		2	1	1	1	1	1	1	3	1	13	2	3	2	7
	女				4	3	3	2	5	1	2		2	1	4	2	8	1	4	4	22
	計	0	0	0	4	5	4	2	7	2	3	1	3	2	7	3	21	3	7	6	29
24	男				1		2		5	1		1	3			2	13	3	9	3	7
	女				3	5	4	2	3				1	3	3	13	2	3	9	9	11
	計	0	0	0	4	5	6	2	8	1	0	1	3	1	3	5	26	5	12	12	18
23	男				1	2	3		3		1		1	2	1	8	1	4	1	3	
	女				2	1	1	3			1		2	3	1	13	1	4	5	13	
	計	0	0	0	1	4	4	1	6	0	1	1	1	4	5	2	21	2	8	6	16
22	男				1			1	1				1	2	1	3	13	3	4	4	4
	女				2	1	1	2	2	1	2	1	2		2	1	16		3	7	14
	計	0	0	0	3	1	1	3	3	1	2	1	3	2	3	4	29	3	7	11	18
年度		保険	不動産・物品賃貸	学術研究・専門技術サービス	宿泊・飲食サービス	生活関連サービス・娯楽	学校教育	その他の教育・学習支援	医療・保健	社会保険・福祉・介護	複合サービス	宗教	その他サービス	公務員	その他	就職者計	年度	本学研究科	本学他研究科	他学研究科	進学者計
27	男	4	2	2		1	15	1		1			3	12	2	80	27	26	2	4	32
	女	5	2	3		4	18		2	1		4	14	2	102	28					
	計	9	4	5	0	5	33	1	2	1	0	7	26	4	182	計	54	4	10	68	
26	男	5	2	3		2	8	3		1	1		5	7	1	77	26	25		6	31
	女	8	1	2		5	25	1	2	1		5	17		121	24					
	計	13	3	5	0	7	33	4	2	2	1	0	10	24	1	198	計	49	0	11	60
25	男	1	2		1	3	9	3		2	2	1	3	9	1	78	25	24	1	7	32
	女	3	2	1	1	4	21	8	3	1	2	1	5	11	1	132					
	計	4	4	1	2	7	30	11	3	3	4	2	8	20	2	210	計	40	3	9	52
24	男	2				1	11	2					1	11		78	24	19	2	3	24
	女	4	2	1	1	3	19	2		1	1		6	16	1	119					
	計	6	2	1	1	4	30	4	0	1	1	0	7	27	1	197	計	36	2	4	42
23	男		2			2	17	1			1		2	5		63	23	17	1	6	24
	女	5		3	2	6	18	2	1	5			3	19		114					
	計	5	2	3	2	8	35	3	1	5	1	0	5	24	0	177	計	39	1	9	49
22	男	3		1	1	1	15	4			1		2	3	0	69	22	36	1	9	46
	女	2	2	5	0	3	16	2		5	1		2	16	0	111					
	計	5	2	6	1	4	31	6	0	5	2	0	4	19	0	180	計	57	3	15	75

平成 24 年度に実施した卒業生アンケートのうち、学部教育が現在の仕事に役立っているかどうかについての質問項目への回答を掲載する《資料 31》。直接・間接をあわせると 7 割近い卒業生が、役立っているとの肯定的評価を下している。また《資料 32》は、就職者に対する個別インタビューの抜粋である。現在の職業は様々であるが、学部教育や学生生活と、職業選択または職務内容との関連について言及した事例が少なくないことは注目に値する。

《資料 31：学部教育が現在の仕事に役立っているか》



《資料 32：就職者の声》

■人間形成学科卒業生（小学校教員）

「かけがえのない仲間と共に夢を実現できた大切な場所」

現在、私は小学校教員として働いています。教員は小学生の時から夢でした。発達科学部に入学した時は、周りに知り合いもなく、不安もありましたが、学校教育論コースに入ったことでかけがえのない仲間に出会いました。

教育実習の時は、夜遅くまで残ってみんなで授業の指導案を検討したり、大学での講義では、グループに分かれて乳幼児の遊びを考えて発表したりしました。一人では成し遂げられなかったことも、信頼している仲間と共に取り組むことではじめて出来たことが数多くありました。授業以外でも、コースやゼミの仲間と公私共に楽しく充実した大学生活を送ることができました。そんな環境の中で、私は人と人の繋がりの大切さを改めて実感し、教師として、子どもたちにそのことを伝えていきたいと思いました。

今後は、子どもと一緒に遊ぶことや、子どもに近い立場で関わっていけることを最大限に生かし、子どもと共に成長していける教師になりたいと思っています。

■人間行動学科卒業生（商社勤務）

「発達科学部での大学生活で、自分の人生の軸がつけられました」

私は現在、商社の人事部門で人材育成の仕事に携わっています。より会社を発展させるためにそこで働く社員に対して何をすればよいのか、ということ日々考えております。

大学では、「人」に焦点をあてて、社会的・心理的・身体的な面から様々なことを学びましたが、次第に人が歳を重ねることで起きる変化に興味を持ちました。ゼミでは加齢にともない起きる筋力やバランス能力の変化を分析し、より高齢者が健康的に生き生きと暮らすには、ということに勉強していました。

このように大学時代に感じていた「人が年を重ねても生き生きと暮らせれば」という思いは、現在仕事を通じて日々感じている「社員1人1人が生き生きと働き満足のできるキャリアをつくることのできるよう手助けをしたい」という思いにつながっていると感じます。

今後もこの思いを大切に仕事に精進したいと思っています。

■人間表現学科卒業生（文化振興事業団勤務）

「表現学科で得た、今までの殻を破った新しい自分」

私はホールの企画制作スタッフとして、事業の運営やボランティアのサポート、広報物の作成等を行っています。もとは教員を志望し、学校音楽教育について研究しましたが、一筋縄ではいかないテーマに悩みながら「学校」や「音楽」について深く考え、自分自身を見直した結果、現在の仕事を選びました。

表現学科の何よりの特徴は、芸術の分野に捉われず、授業や先生方、仲間たちとふれ合えることです。表現からにじみ出る仲間たちの個性や、物事に対する感じ方の変化を何度も体験した学部時代、研究の内容も手法も違う仲間との日々の会話や、先生方のアドバイスから新たな視点を見出した大学院時代。学生時代に多様な表現を学び芸術への関心を深めた私の今の目標は、芸術の面白さを多くの人々に伝えることです。表現学科では自分の興味関心に真剣に取り組む姿勢が必要ですが、そこで得られるものはきっと、それまでとは違う新しい自分だと思っています。

■人間環境学科卒業生（放送局勤務）

■「大学での学び・経験×探究心＝テレビ番組制作でということ」

「ホームレス」「フェアトレード」「持続可能性」－大学時代に学んだこれらのテーマ、実はこれまで私が担当した番組のテーマでもあります。

私は入学時、将来の夢はありませんでした。そんな私が社会環境論コースで学んだのは、問題意識を持って現場に出ること。ゼミではテーマを決めて各地へフィールドワークに出かけました。貧困の調査ではフィリピンに行ったり、卒業論ではホームレス研究で西成の日雇労働者の街に通いました。こうした経験を重ねるうちに、「今やっつてることを仕事にしたい!」と思い始めました。そして私はTVディレクターになる夢を見つけました。

今は夢が叶い、「問題意識を持って現場に出ること」で、多くの人に自分の興味関心事をわかりやすく伝える仕事をしています。このように発達科学部では様々な経験を重ね、追いつけたいと思えるテーマを見つけられました。将来が見えない人にこそ、この学部で未来を見つけてほしいと思います。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

就職率、進学率ともに高く、状況は良好である。卒業生を対象としたアンケートからは、学部教育と職業との関わりが示され、就職者の声では、学生生活と職業選択との関連をはじめとする具体例が示されている。本学部の進路・就職の状況は期待される水準を上回ると判断する。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

##### 事例① 文部科学省「グローバル人材育成推進事業」等を通じた教育の国際化の取組

平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業」に人文・人間科学系及び社会科学系部局連携による取組が採択された。この取組は、国際社会の持続可能な発展を可能にする「問題発見型リーダーシップ」を発揮できるグローバル人材の育成を目標とする。発達科学部では、国際的な視野で、開発・人権・貧困・平和・福祉・倫理・健康等に関わる諸問題を発見したうえでグローバルな協力体制を先導する力量を持ち、かつ日本社会に対するアイデンティティを有する人材、具体的には、グローバルな視点で課題をとらえ、種々の活動を介して協働的・主体的な学びを組織できる教育力を有し、異文化を尊重するマインドを持つ教育者・ファシリテーター等の育成を目指した取組を展開している。(事例①の具体的内容については《別添資料2》を参照)

##### 事例② HCセンター、サイエンスショップ等を活用した社会における活動を通じた主体的学習

平成23年の東日本大震災後の被災地での復興支援活動、岡山県の国立ハンセン病療養所でのワークキャンプ、地域の科学教育支援として小学校等での天体観望会開催など、HCセンター、サイエンスショップ等を活用し、学生が正課内外で社会と関わる活動を展開し、主体的に学び成長する機会が提供されている《資料33》。

この結果、学生は地域コミュニティ等の現場での経験を通じて、多様な人々とのコミュニケーションと協働、そのコーディネートなどの能力を高めるとともに、社会での経験を通じて人間の発達や持続可能な社会づくりに関する学びを深め成長している。同時に、これらの活動は、地域コミュニティとそこに暮らす人々に貢献している《資料34》。

《資料33: 発達支援インスティテュート HCセンター及びサイエンスショップの学生が参加する社会での取組の例(2014年度 人間発達環境学研究科・発達科学部 年次報告書)》

#### 9. 付属施設

##### 9.1. 発達支援インスティテュート

(中略)

##### 9.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(中略)

(5) ボランティア社会・学習支援部門 (担当 松岡広路)

#### 1. 「震災復興支援プロジェクト」の企画・実施支援

2011年3月11日に発災した北東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市赤崎町(死者47名、被害家屋約900戸/全1429)の支援は4年目となり、被災地の生活はさらに過酷な状況になりつつある。緊急時支援・復旧支援から、生活支援・まちづくり支援に活動の内容が移行するなかで、遠方のボランティアの役割はなにか? 真の復興に行きつくために今できることは何か? これらを、学生ボランティアとだけではなく、被災住民と共に考え、少しずつ企画や事業を実行してきた。

昨年同様、神戸大学基金、震災復興・防災科学推進室、人間発達科学研究科、都市安全研究センターの支援を受けながら、あるいは、「11えん募金」を通しての神戸市民からの支援を受けて、ほぼ毎月、全20回にわたり現地で活動した。2013年度参加学生ボランティア数はのべ約70名で、本プロジェクトのメンバーとして被災地で活動した。中赤崎復興委員会の活動を実質化するために、「赤崎復興隊のつどい」支援とソーシャルビジネスを通してまちの活性化を図る「赤崎復興市プロジェクト」の活動支援に全力を尽くした。復興の現実はいまだ厳しいが、まちの消滅を防ぐための方法を、主にESD・社会教育の観点から探っている。

(中略)

#### A) 「赤崎復興市」の活動支援

年6回(6月、7月、9月、10月、11月、12月)、津波の跡地を活用して開催された赤崎町の復興市の企画・運営を、学生ボランティアの協力を得て支えてきた。このなかで、学生企画「たこ焼きプロジェクト」を通して、赤崎の中高生が復興活動に参加するきっかけを生みことができたり、仮



設住宅の人たちが物を作りうる喜びを感じたり、町外に出てしまった元赤崎町民の人の再会の場をつくることができた。

B) 「赤崎の声宅配便」の発行

毎月「月一訪問隊」として本部門担当教員と数名の学生ボランティアが被災地を訪問し、仮設住宅訪問や赤崎復興隊のつどいに参加してきた。ようやく被災者の自然な声を聴くことのできる関係を作るに至っている。教員・学生と被災者とのあいだの信頼関係が生まれ、被災時の様子や今の生活状況について傾聴できるようになった。学生たちがそうした被災者の自然な声を新聞調にまとめ、次の訪問時に自ら仮設住宅を訪問し配布したり、赤崎町の回覧板を利用したりして赤崎町の人たちにお知らせしている。これが『赤崎の声宅配便』である。メンバーの意識化だけではなく、仮設住宅の人たちがずいぶんと楽しみにしてくださっている。

(中略)

9.1.5. サイエンスショップ

(中略)

(3) 学部・大学院教育

学部授業科目「ESD 演習 I」および「ESD 演習 II」については、サイエンスショップが平成 19 年度から市民グループの取組に対して支援・連携を行ってきた南あわじ市がフィールドとして設定され、履修学生が、同地域に新設された大学の学生が地域の人々と交流を深め、農業に参加・支援することを通じて農家と学生の双方にメリットを生む仕組みを検討・デザインするなど、地域課題に関するフィールドワークが行われた。この取組の結果は、南あわじ市において開催された「第 1 回地域の未来フォーラム」(主催：南あわじ市大学連携推進協議会、南あわじ市)において学生により地域の人々に報告された。

(中略)

この他、学部学生を中心とした正課外の取組として、地域の小学校等で天体観望会の開催に取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」も、学科の壁を越えて学生が参加し、神戸市の小学校で 2 回の観望会を開催した他、人間発達環境学研究科が「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト～アクティブエイジングを目指して～」の取組の一環として開催した月の観望・講演会(平成 26 年 9 月)に協力した。

《資料 34：HC センター、サイエンスショップ等を活用した学生の社会活動への参加学生および市民の評価の例》

(1)HC センター「持続可能な島づくりプロジェクト」ワークキャンプ参加学生の感想より(平成 27 年度)

・ワークキャンプ最後の夜にはつどいの広場で火を囲んで、長島という場所に、また、ここにあるすべてのいのちに、そして、一週間共に過ごしたメンバーに感謝をする時間を持ちました。光明園が、誰かの第二のふるさととして、たくさんのいのちを包んでいる。そんなことを思いながら最後にふるさとを歌いました。一週間、邑久光明園、長島でワークキャンプをするなかで、沢山沢山土地に触れさせていただきました。そのなかで、長島の自然や歴史や、ここに生きた方々の暮らしやいのちを感じ、ぼらぼん・私たち・私自身がこれから何ができるか沢山のことを考えるきっかけになったと思います。

(2)HC センター「大船渡 ESD プロジェクト」スタディツアー参加学生の感想より(平成 27 年度)

・今まで 3 回だけですが、被災地に行き、さまざまな声を聴いて、様々な光景を目にしてきました。しかし、今回の大船渡支援プロジェクトはその中でも特にたくさんの方を考えた、また地域の方との距離がものすごく近かったことが印象的です。それは神戸大の方が今まで 4 年以上、赤崎に通い続け、地元の方と一緒に復興を支えてこられたからだと思います。とても心を動かされる気持ちです。今回、この企画に参加できて本当に良かったです！今までの反省、新たな気づきなどを踏まえて、これからの活動につなげて行けたらと思っています。これからも今回のご縁を大切にしていけたらと思っています。

(3)サイエンスショップを活用した学生グループによる天体観望会に参加した保護者の感想より(平成 25 年度神戸市立御影小学校)

- ・星がすごく明るくてきれいで見せる機会ができて感謝しています。
- ・本格的な望遠鏡で見る機会がなかなかないので とても良かった。
- ・望遠鏡ごとの担当の方がおられて尋ねると質問に答えてくれた。
- ・お話がとてもわかりやすく、大人にも勉強になりました。
- ・子供たちにとっても優しく接してくれて分かりやすく説明してくれた。

- ・最後のお兄さんの質問コーナーが良かった。
- ・一人で夜空を見上げることはあってもあんなにたくさんの人で同じ空を指差してみるのはとても新鮮でそれがうんと遠くにあると思うと宇宙の広さについて感動しました。

(4)サイエンスショップを活用して小学校での天体観望会開催などに取り組んだ学生グループメンバーの声（平成 27 年度アンケート調査より）

- ・説明資料の作成やパワーポイントの発表など、相手によりわかりやすく伝えるための技術が向上した。
- ・相手にわかりやすく伝える為に、望遠鏡の仕組みや宇宙の知識等、自分自身の科学的知識が深まった。
- ・学校や地域団体と連携しながら企画を進めることでコーディネート能力が身に付いた。
- ・サイエンスショップやアストロノミアの活動は学内だけでなく対外的な活動が多く、学生以外の立場の方との関わりも多い。学生の視点からはなかなか出ないような意見をいただき、改善するためにミーティング等を重ねていくうちに、幅広い視野を持って活動、行動できるようになったと感じている。また、私自身卒業後教職の道に進むこともあり、子どもたちに理科の楽しさを感じてもらうために試行錯誤した経験自体が、今後活かさせるのではないかと思う。

### 事例③ 授業のピア・レビューを通じた授業改善

平成 23 年度より、学部共通科目・学科共通科目を中心として対象科目を選定し、授業のピア・レビューを実施している（前期授業については 7 月、後期授業については 12-2 月に実施）。平成 26 年度後期からは、各学科・専攻が、「ピア・レビューを行う科目とレビューワーを選定し、レビューワー及び授業担当教員が当該の授業内容を点検・評価し、作成したレポートを基に改善点等を議論し、対象授業の改善を図る」という新しい実施体制によるピア・レビューを開始した。レビューに先立ち、自己評価委員会において、ピア・レビューレポートを記す際の注目点について議論し、レポート用紙の改訂を行った。各年度のピア・レビュー実施状況を《資料 35》に、ピア・レビューレポートの内容の抜粋を《資料 36》に示す。《資料 36》のように、次年度の授業改善に向けた具体策を授業者に提示することで、授業の質的向上を図っている。

#### 《資料 35：ピア・レビュー実施状況》

	H23	H24	H25	H26	H27
学部共通	発達科学への招待	発達科学への招待	発達科学への招待	発達科学への招待	
人間形成	教育学概論 子ども発達論 臨床心理学 道徳教育論 発達支援論研究	心理学概論 初等家政学概論 障害児発達学	道徳教育論 心理学研究法 1	教育学概論 理科教育方法論	心理学研究法 2 発達支援論研究
人間行動	行動発達概論 身体運動のしくみ	からだの構造と運動	身体行動概論 からだの構造と運動	行動発達概論 身体運動のしくみ	健康発達概論 身体機能加齢論
人間表現	人間の発達と表現	表現文化概論 表現創造概論 臨床・感性表現概論	人間の発達と表現	表現文化概論 創造の発想とプロセス B	身体表現論 表現創造概論
人間環境	人間環境学概論 生活環境概論 社会環境概論	エコロジー論 自然環境概論	生活環境調査法 自然環境概論 数理情報環境概論	人間環境学概論 社会環境概論	人間環境学概論 生活環境概論
大学院	ヒューマンコミュニティ創成研究 スポーツ文化史特論 I	ヒューマンコミュニティ創成研究 建築文化史特論 I	人間発達総合研究 サイエンスコミュニケーション演習	人間発達総合研究 人間環境相関研究	人間発達総合研究 人間環境相関研究
	人間環境相関研究				

## 《資料 36：ピア・レビューレポートの事例（抜粋）》

---

**授業科目名**

「身体運動のしくみ」

**授業において優れた点・工夫が見られた点**

毎回、その日の講義内容から課題が出され、それをその時間内に解答させることで、学生に講義をしっかりと聴こうとする姿勢が窺えた。発声の大きさ、明快さはたいへんよく、マイクなしで十分聞き取れた。また、資料、テキストともに有効に利用されていたと思う。

講義内容の解説も基本的なことから丁寧に説明されており、わかりやすい講義であったように思う。

**次年度の授業改善に向けて、強化できる点**

その日の講義の内容（テーマ）によるので、一概には言えないが、もう少し双方向性を持たせるような工夫が必要かもしれない。学生にもう少し発言を求める機会があってもよいかと思う。

---

**（２）分析項目Ⅱ 教育成果の状況****事例① 卒業率、免許・資格所得・受賞、進路への影響**

卒業率は一貫して高く、単位の習得状況も良好である。休学者数、退学者数の目立った増加はない。教育職員免許状や学芸員資格の取得に加え、美術・芸術・創作部門やパフォーマンス活動における受賞が特筆すべき本学部の特徴であり、近年では全国規模の学会における環境発達に関わる研究発表の受賞も複数報告され、学部教育の成果が、対外的にも高く評価されていることがわかる。また、就職率と進学率は、一貫してともに高い。卒業生を対象としたアンケートにおいて、学部教育に対する高い満足度と肯定的な評価が得られており、特に、学部教育が現在の仕事に役立っているかどうかについての質問項目への回答については、直接・間接的な効果をあわせると7割近い卒業生が、役立っているとの肯定的意見を示している。また、就職者に対する個別インタビューでは、学部教育や学生生活が職業選択に好ましい影響を及ぼし、現在の職務内容との関連性の強さが示されている。